

---

# 盲人用押ボタン付横断歩道での珍事

unbelievable\_kazoo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

盲人用押ボタン付横断歩道での珍事

### 【Nコード】

N3560T

### 【作者名】

unbelievable | kazoo

### 【あらすじ】

盲人用押ボタン付横断歩道で起きた不思議な出来事です。

一人で横断歩道にいたとき、何となく盲人用のボタンを押した。ボタン押した理由は特に無い。言うならば、押したかったから、だろうか。

左右を確認したが車が来る気配もなく、私はさっさと渡ろうとした。

すると、向かい側の歩道にキャップ帽を被った少年の姿が見えた。その少年はじつとこつちを見ていた。まるで青信号になるまで渡るんじゃない、と私を見張っているようだった。

少年の前で悪い手本を見せるのも気が引けるので、青信号になるまで待った。

青信号になり、私は横断歩道を渡り始めた。盲人専用の音が鳴っていた。

少年は私の方をまだじつと睨みつけていた。

何だ、あの野郎は。

私がそう思ったとき、その少年はいきなり走りだし、私に向かってきた。

私は足を止めた。少年は私の前でピタッ、と止まると、私を睨んで開口一番に叫んだ。

「見えてんのに押してんじゃねーよ!」

何だ、このガキは。

私は腹が立ち、何か言い返してやろうと口を開いた。

すると、今度はその少年が私に向かって突進してきた。

私はとっさに身を引いて受け身の体勢を取った。

だが、突進の衝撃はなかった。少年は私の体をすり抜けていった。私はそこで立ち竦んだ。何があったのかさっぱり分からず、振り向いたら歩道には少年の姿はどこにも見えなかった。

私はさっさと横断歩道を渡ることにした。背筋が少し寒くなった。

渡りきって、さつき私がいた側の横断歩道の方を見た。  
すると、サングラスをかけた目の不自由そうな男性がゆっくりと  
横断歩道にやって来た。

点字ブロックの上で下を向いて少しオロオロしていた。私は親切  
のつもりで盲人用のボタンを押してあげようとした。

だが、さっきの少年がふっと向かい側に現れて先にボタンを押し  
てしまった。そして、あの少年は私の方を向くとドヤ顔をして、さ  
らにアツカンバーまでしてきた。

何を、生意気な幽霊だ。<sup>ガキ</sup>

私は少し腹を立てたが、幽霊に腹を立てても仕方がない。

私はぐつと堪えることにした。

やがて信号が青に変わり、盲人専用の音が流れ始めた。

すると、そのサングラスをかけた男はくるりと回れ右をすると、

そのまま横断歩道を渡らずに踵を返してしまった。

「渡んねーのかよ！」

私と幽霊が口を揃えて叫んだ。男性はびっくりしてこっちを向い  
た。

男性は私の方を向いていた。

私は幽霊のいた方を向いたが、もういなかった。

私は男性に対してその場で頭を下げて、赤面しながらその場を足  
早に去ることにした。

(後書き)

ご拝読、ありがとうございます。

後味の良い終わり方を目指して書いてみたのですが、いかがでしたしょうか？

ここまで読み終わって下さり、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3560t/>

---

盲人用押ボタン付横断歩道での珍事

2011年10月8日23時28分発行